

# 大和における御田植祭の系譜

武藤 康弘

## 1、はじめに

御田植祭と総称される祭礼は、五穀豊穡を祈念して水田および水田を模倣した場所で行なわれるものである。これらは、年初に豊作を祈念して一年の農作業を模倣して演じる予祝儀礼としての田遊びと、5月ないしは6月の田植えの時期に田植え歌を歌ったり、舞を踊ったりしながら実際に田植えを行なう田植え神事に、大きく2分類される。

大和の国奈良県において、春先の農作業の開始前に行われる重要な祭礼が、豊作を予めお祝いするオンダ（御田）祭とよばれる行事である。オンダ祭では、牛役や田男役が登場して砂をまいた神田を耕したり、松葉で作った苗で田植えしたり、模倣的な農作業が演じられるという特徴がある。このようなオンダ祭は、先の分類の田遊びに相当するものである。

新井恒易氏は全国の田遊びを集成的に研究した論考のなかで、近畿地方の田遊びを57事例集成している。そこでは、特に奈良県に田遊びが集中しているのが注目され、全体の半数にあたる27事例が報告されている。このような奈良県の集中的な分布に対して、大阪府では、摂津の代表的な田遊びである平野区の杭全神社と住吉大社の御田植神事の2事例のみしか伝承されていないのである（新井 1981）。

この極端な分布の偏りからもわかるように、奈良県には稲作に関する祭礼が数多く伝承されている。その理由として、奈良盆地が中近世から近畿地方の穀倉地帯であったためと考えられる。さらに、大和の風土が、古くからの祭礼や行事を大切に保存し伝承してきたことがあげられるのである。

一方、奈良県内に分布する御田植祭が、すべて田遊びである点が大きな特徴としてあげられる。本論では、奈良県内の御田植祭が、なぜ年初の予祝儀礼としての田遊びしか存在しないのか、その要因を歴史遡及的に検討してみたい。なお、本論中ではオンダ祭を含めてすべて御田植祭という用語で統一しているが、とくにことわらないかぎり、これらはすべて田遊びを意味している。なお、現在奈良県内でも実際に田植えを行う御田植神事がいくつか存在するが、それらはいずれも近年成立したものである。ただ、田遊びの形式の祭礼のなかにも、催行時期が比較的遅く実際の田植えの時期に近時する事例が存在する。代表的なものとして、宇陀市野依の白山神社御田植祭と天理市の石上神宮の神田神社の御田植祭の2事例が上げられる。特に、後者の神田神社の御田植祭は、現在石上神宮の神剣渡御祭として行われているが、社伝の史料から本来神田で実際に田植えを行っていたものが、神社の遷御によって神田が無くなってしまったことで、田遊びの形式に移行した可能性がある。

## 2、大和の御田植祭の研究史

先に奈良県内の御田植祭は田遊びの形式をとることにその特徴があることを示したが、次になぜ田遊びの形式のみになっているのか、御田植祭の歴史的展開と系譜をたどるために、先ず先行研究を概観してみたい。

### 1) 近現代における奈良県内の御田植祭の研究

現在春先に県内各地で行われている御田植祭は総数で50事例ほどある。これらの行事の概要については、『奈良県史民俗編（下）』（奈良県史編纂委員会 1988）などの基本的な文献に掲載されて

いる。近年は、インターネットによる情報公開も盛んで、奈良県観光課が運営する「大和路アーカイブ」によって、各地の祭礼の概要や日時などの情報が発信されている。しかし、このような奈良県内各地で現在行われている御田植祭が、すべて大きな変更点なく中近世から連綿と受け継がれてきたわけではない、明治時代以降の100年余をみても、大きく変化しているのである。

奈良県内の伝統的な祭礼行事の昭和初年の状況を記録した資料としては、辻本義孝氏の『和州祭礼記』(辻本 1938) が最も重要である。辻本氏は昭和十年代の磯城郡下の祭礼を詳細に調査し、一部は写真にも残している。御田植祭についても磯城郡内の相当数の事例を報告している。これらの行事は、すでに廃絶してしまったものや、大きく変容しているものも一部にあるが、大部分は現在と大きな変更点なく催行されていたことがわかる。特に、現状との相違点をあげるとすれば、催行主体となる「講」や「宮座」といった組織が殆ど機能しなくなってしまい、より開放的な祭礼催行組織である「村座」へと移行し、近年ではさらに経費負担を均等化して当(頭)屋制から保存会へと移行しているという実態があげられる。これは、戦後の農地解放における農村の経済基盤の変化、昭和30年前後の新生活運動、平成になってからの農村の少子高齢化などが、本来の宗教結社としての祭礼催行組織の性格を変化させてしまったものと考えられる。

一方、昭和初年には現在と大きな変化がなかった御田植祭も、大正期までさかのぼるとかなり異なった様相であったことが、当時の公文書から明らかになっている。この中で、特に重要なのは、大正天皇の御大典の記念事業の一環として、大正四年に奈良県内の農事とそれに伴う儀礼を調査集成した『神社ト農事トノ関係』(奈良県行政文書・未刊行)と奈良県の民俗について町村毎に報告書をまとめた『奈良県風俗誌』(奈良県行政文書・未刊行)の2点の史料である。前者は、稲作に関わる神事および祭礼がどのように行われているのかを集成したものである。岩坂七雄氏と池田淳氏は、この史料をもとに吉野水分神社の御田植祭の歴史の変遷について詳細な研究を行った(樋口岩坂・池田 2000, 2002)。また、入江英弥氏は後者の史料をもとに宇陀市野依の白山神社の御田植祭の歴史の変遷を研究し、大正時代に頭屋がショットメ役を演じるという、現在とはかなり異なった様相であったことが明らかにされている(入江 1995)。

明治時代における御田植祭の状況については公文書などの資料は少ないが、明治初年の神仏分離と廃仏毀釈、神社の合祀などによって、前代とは相当大きな変化があることは明白である。この時期は、春日大社の社伝神楽が全国各地の神社に伝習されるなど、神社を中心とする祭礼行事そのものが国家的に再構築された時期といえるのである。(春日顕彰会 1975 1989)。

## 2) 大正年間における大和の地域研究の興隆

前節で詳述した近現代の奈良県内の御田植祭の研究史のなかで、注目すべきは大正年間が大和の国奈良県地域研究の興隆期であったことである。大和の地域研究とは、すなわち社寺における祭礼の研究や民間風俗の研究を意味する。その契機となったのは、大正四年十一月の大正天皇の御大典に関連して、神社における神事や祭礼の調査報告が行われたことにある。その資料は、前節でも言及したように、神社における農業に関わる神事を調査報告したものである。(樋口・岩坂・池田 2000, 2002)。神社祭祀における旧儀を解明するということは、『明治二十四年調 官幣社儀式』(奈良県庁文書1898)や神祇院の『官国幣社特殊神事調』と同じ視座から研究が行われているように見えるが大正時代の奈良県の地域研究の興隆はその域にとどまらない。大正四年当時の御大典の華やかな風潮と、第一次大戦の特需景気に、さらには当時の自由な思想潮流があいまって、地域研究はさまざまな方向へと深化していく。

その一分野が、奈良県における風俗(民俗)研究である。前述の神社祭祀の調査と同時にまとめ

られた『奈良県風俗誌』は、奈良県が各市町村の教育会に調査を依頼し、市町村毎に資料化されたものである。その調査項目には、生活文化から社会構造、信仰から祭礼まで多岐にわたっている。このような資料をもとにして、大正八年には当時奈良高等女子師範の教授であった豊田八十代によって『奈良の年中行事』がまとめられる（豊田 1919）。そして、このような奈良県の地域研究の興隆は、大正十一年の辰己利文の奈良文化学会の設立と『奈良文化』の刊行に結実したのである。このように、大正年間、明治時代はじめの宗教的混乱の時期から、比較的自由的な思想潮流の元、足元の文化や民俗といったものを再認識する時期であったといえるのである。この点から研究史を遡ってみると奈良県内の祭礼と民俗の研究も、万葉故地研究と共通の土俵の上に立っていたといえるのである。

### 3、奈良県内の御田植祭の儀礼としての構造分類

本章では、平成十四年から十八年にかけて筆者が実施した御田植祭の現地調査の資料をもとに、祭礼の構成要素と催行時期によって大きく4類型に分類して、その特徴を分析することにする。

#### (1) 初祈祷の要素をもつ御田植祭

弓打ち等の所作をともなう御田植祭を第1類として区分する。本類に属する御田植祭は、数は多くはないが、奈良盆地北部と東端部に分布する。これらは、ケチン（結鎮）やケイチン等とよばれる行事と一体となっており、弓打ちや櫛の葉を用いた荘厳など、明らかに仏教の影響を強くうけた御田植祭といえる。これらは、地域の寺院における修正会である初祈祷（オコナイ）を構成する行事ととらえることができる。代表的なものとして次の2事例があげられる。

##### 1) 奈良市押熊町の八幡神社の御田植祭

奈良市押熊町の八幡神社の御田植祭は、毎年正月11日に行われる。御田植祭では、図1と図2に示したように、はじめに拝殿に菰をしいて神田にみたてた一角で、唐犁や鋤を用いた田起しから、

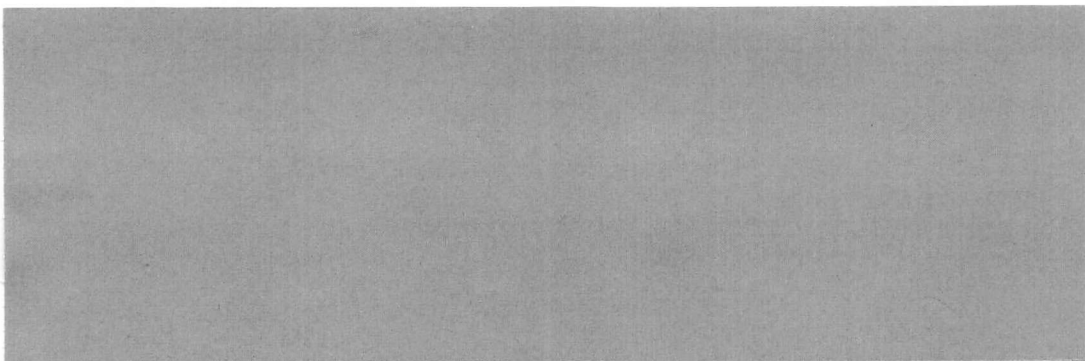


図1 押熊八幡神社唐犁

図2 押熊八幡神社籾種まき

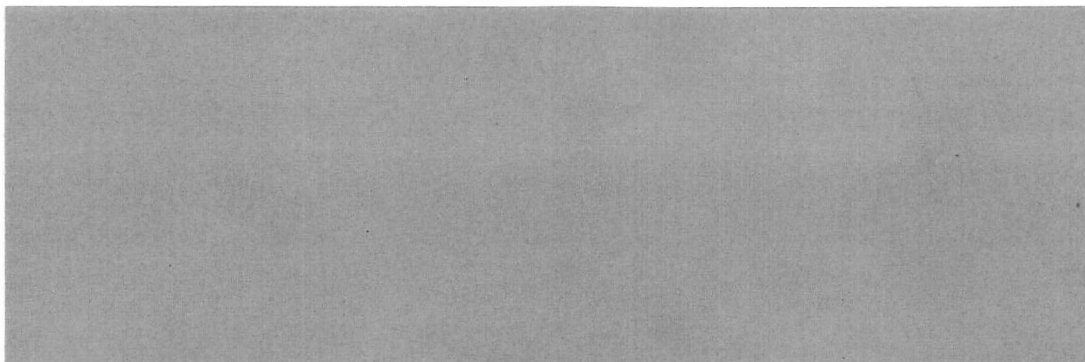


図3 押熊八幡神社弓打ち

図4 押熊八幡神社弓打ち

苗代造り籾種まきまでの一連の農作業の所作を模擬的に演じる。そして、農作業の所作が終わってから、次に、弓打ちが始まる。これは、図3と図4に示したように境内の一角に「鬼」の字を描いた矢的を置き、頭屋が矢でそれを射るものである。類似した祭礼は、隣接した中山町の八幡神社においても行われている。

## 2) 桜井市小夫の天神社の御田植祭

桜井市小夫の天神社の御田植祭は、現在2月第二日曜日に天神社の境内で行われている。始めに神事が行われ、その後で神職による弓打ち式が始まる。神職は、図5に示したように御田植祭の神田を区画する注連縄の外側2ヵ所に立てられた蛇の目に鬼と書かれた矢的めがけて矢を放つのである。弓打ちの後で、農作業を模倣する所作が行われる。はじめに、畦きりや畦塗り所作がおこなわれ、次に図6に示したように、牛役が登場して唐犁や馬鍬を使う所作を行う。苗代田が整ったところで籾種まきの所作が行われ、最後に松苗が撒かれる<sup>①</sup>。



図5 小夫天神社御田植祭弓打ち



図6 小夫天神社御田植祭牛耕

この両者の事例では、ともに弓打ちが農作業を模倣する所作の前後に行われるのが特徴である。さらに、前者ではナエカズラ、後者では花カズラという奉納物が特徴的にみられる。前者のナエカズラは、ワラを束ねたものに籾種と松葉と榊の葉を挿したもので、後者の花カズラは榊の枝に藁を巻きつけ、さらに米を包んだ白い和紙を結んだものである。このような行事や奉納物の構成要素は、仏教行事である初祈禱(オコナイ)や結鎮などの行事との密接な関係があるといえる。この点から、現在は神社祭祀として行われているこれらの御田植祭は、新井恒易氏が指摘するように、本来寺院で行われていた修正会などの年初の行事を構成するものであったものと考えられる(新井 1981)。

この他にも、同じような寺院の年初行事としての要素が残る事例として、宇陀市平尾水分神社と川西町保田の六県神社、それに田原本町蔵堂の村屋神社の御田植祭があげられる。平尾水分神社の御田植祭では、一般的な松葉を用いた模造苗ではなく、図7の榊の葉を用いた模造苗を使用する。この模造苗はカヤを二本棒状に束ねた先端に小さな幣紙を挟み、さらに、3枚、5枚、7枚の葉がついた3種類の榊の枝をさしこみ、それに籾を除いた稲の穂先をつけたものである(上野1995)。模造苗の先端に挟んだ幣紙は、牛玉札様のもので榊の葉を使用する点からみても、先のナエカズラや花カズラと同様の仏式の奉納物といえるのである。一方、川西町の六県神社の御田植祭でも特徴的な奉納品がある。それは、図8の榊の枝で作った模造苗である。榊の枝の中央には牛玉札が巻きつけてある。牛玉札は隣接する富貴寺の牛玉札で、神社祭礼としての御田植祭で、本来は寺院で授与される牛玉札が配布されていることになる。筆者が平成14年に行った現地調査の際に、昭和十年頃までは富貴寺の講の組織によって御田植祭が行われていたという話を聞くことができた。村屋神社の御田植祭では、最後に御供撒きが行われるが、その時、牛玉札でモチを包んでいる。この牛玉

札は森講とよばれる祭礼組織によって用意される。御神宝も牛頭天王ゆかりの牛玉である。

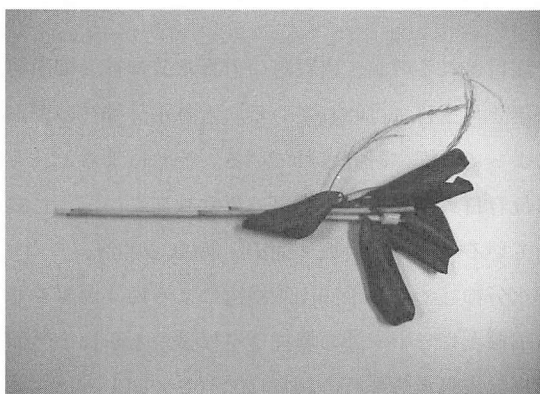


図7 平尾水分神社櫛の模造苗

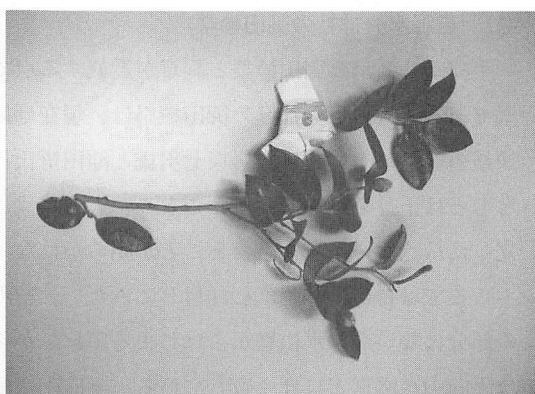


図8 保田六県神社櫛の模造苗

## (2) 詞章をともなう芸能的要素をもつ御田植祭

詞章をともなう芸能的要素をもつ御田植祭を第2類として分類する。現在伝承されているものとしては、奈良市の手向山八幡宮、奈良市の菅原八幡神社、吉野町の吉野水分神社、大宇陀町の平野水分神社、川西町保田の六県神社の御田植祭があげられる。これらの詞章がある御田植祭は、従来の研究でも芸能の系譜を究明する上で最も重要視されている(新井 1981)(大宮 1981)(樋口・岩坂・池田 2000, 2002)。

以下、代表的な事例について個別に詞章を分析していくことにする。

### 1) 手向山八幡宮の御田植祭

この分類に属する御田植祭の代表的な事例として、奈良市雑司町の手向山八幡宮の御田植祭があげられる。御田植祭は現在2月3日の節分の日に行われている。御田植祭では図9に示したように、神事にさきだち境内を巡る「お渡り」があり、続いて水口祭からはじまる農作業を模倣する所作が行われるという古式の様相を呈している。御田植祭は、田主役

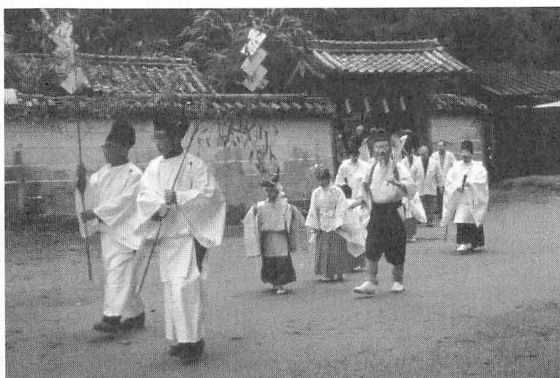


図9 手向山八幡宮御田植祭渡御

の神職と牛役の少年とで、田起しから苗代つくりまで、農作業を模倣する所作が展開されるが、それぞれの所作にとりかかる前に、対応する詞章がよみあげられる。一方、田植えの所作は少女が扮する早乙女によって執り行われるが、田植えの所作そのものを模倣するのではなく、松葉で作った模造苗を台の上に奉納するという象徴的な形式をとる。最後に田主が格調の高い詞章を唱えて、御田植祭は終了する。手向山八幡宮の御田植祭が、芸能の系譜を研究する上で重要視されるのは、同社には江戸時代後期の文政元年の祭礼の様子を描いた『御田植図巻』が伝承しているからである。江戸時代後期に描かれた古絵図を、現在の御田植祭と比較してみると、約200年の時を隔ても、全体の構成に大きな変更点がないことに驚かされる。しかし、いくつかの相違点も存在する。一番大きな相違点は、江戸時代にはあった若宮社が、明治時代以降失われてしまったことである。『御田植図巻』の「お渡り」の部分では、先頭の竹が3本描かれているが、現在は若宮社の竹が無くなり2本となっている。お渡りそのものも境内を一周するだけになってしまっている。また、御田植祭の後半の早乙女による田植えの所作も、江戸時代までは若宮社所属の八乙女によって神楽が舞われていたものと推定されている(浦西 1990)

(樋口・岩坂・池田 2000, 2002)。

## 2) 吉野水分神社の御田植祭

手向山八幡宮の御田植祭と詞章が近似する点で注目されるのが、吉野町の吉野水分神社の御田植祭である。吉野水分神社の御田植祭は、現在は毎年4月3日に行われている。吉野水分神社の御田植祭の変遷については、岩坂七男氏と池田悟氏によって詳細に研究されている。それによると、もともとは正月の行事であったことや、大正時代には春日大社の御田植神事の巫女神楽を伝習して成立した八乙女舞が存在したとことが明らかになっている(樋口・岩坂・池田 2000, 2002)。

ここでは特にその詞章に注目してみたい。吉野水分神社では、手向山八幡宮のように「お渡り」の部分はないが、水口祭からはじまる田起しから田植えまでの一連の農作業を模倣する所作の序列は手向山八幡宮とほぼ一致している。手向山八幡宮と吉野水分神社の詞章は90%まで同一といってよい。しかし、吉野水分神社の詞章を詳細に分析すると、田起しから田植えまでの農作業を模倣する所作と対応する詞章との間に齟齬が生じていることが注目される。以下にその部分を抜粋すると、手向山八幡宮では「打ち候へばこしき飯の香がぱっとして候」となる部分が、吉野水分神社では、「肥ヲツカイ候程ニ古シキノ香ガパウツシテ候」となっている。田起しの所作にともなう同様の表現は、宇陀市の平野水分神社でもみられるが、平尾水分神社でも手向山八幡宮と同じように、田を耕した時に「甑飯の香がパットをした」という表現になっている。同じような所作と詞章のズレは、続く田見回りの部分にも見出される。吉野水分神社では「見廻リテ候程ニ古酒ノ香ガパウツシテ候」となっているが、後半の表現は、手向山八幡宮の「打ち候へばふる酒の香がはっとして候」のように本来は田起しの部分に対応するものと考えられる。これ以外にも、城崎陽子氏が指摘する「早乙女ヲ成就申候」のように、明らかに詞章の写し間違いと考えられる部分がある。この部分も本来は、手向山八幡宮のように「早乙女子をしょうじ申して候」となるべきものと考えられる。これに加えて、吉野水分神社の御田植祭の構成上の最大の特徴として、他の御田植祭にみられない稲刈りの所作が付加されている点があげられる。以上のような詞章と対応する所作の構成の分析から、吉野水分神社の御田植祭の詞章は、手向山八幡宮の御田植祭の詞章と酷似しているものの、より後世の変容が大きいものと判断される。手向山八幡宮の御田植祭の詞章は、江戸時代後期の文政元年の『御田植図巻』の巻末に記載されたもので、吉野水分神社の御田植祭の詞章は、おそらく明治初年の吉野山の宗教的な混乱の時期以降に大きく変容したものと推定される。

## 3) 隣接地域の御田植祭の詞章との類似性

一方、このような御田植祭の詞章の類似は、大和を越えて摂津の御田植祭の間でもみられる。手向山八幡宮の御田植祭では、最後の部分で田主の「大かうじをふたつならべて」という台詞が格調高く謡われるが、同じ詞章は摂津の代表的な御田植祭である大阪府平野区の杭全神社の御田植祭にもみられる。杭全神社では田起しから籾種まきまでの一連の農作業を模倣する所作をシテが行うが、その場面ごとに地方が「大柑子を二つ並べて、福の種を蒔こうよ」と読み上げる。

また、杭全神社の御田植祭の種蒔の所作では、シテが以下のような詞章とともに、籾種を拝殿の四方に蒔く。

「和泉の国いちもり長者の福の種を蒔こうよ」

「河内の国の松浦長者の福の種をまこうよ」

「世の中良ければ、ほながの尉もたーれたれ」

「大和の国のぜぜなげ長者の福の種を蒔こうよ」

「当所も蒔こうよ・宮の前も蒔こうよ・当所も蒔こうよ」

この種蒔の所作に伴う詞章と非常に類似したものが、川西町保田の六県神社の御田植祭の最後に謡われる種蒔歌にみられる。それは、以下のようなものである。

「近江の国通れば、雪森長者に行き合ふをたら（以下略）」

「河内の国通れば、せしなげ長者に行き合ふをたら（以下略）」

「宇陀の郡を通れば、市森長者に行き合ふをたら（以下略）」

「大和の国通れば、橋中長者に行き合ふをたら（以下略）」

杭全神社と六県神社の御田植祭の詞章には、それぞれ国名と対応する台詞に酷似する部分が見られる。このことから、両者とも共通する種蒔歌から派生したものと考えられる。しかし、六県神社の御田植祭では農作業を模倣する所作には詞章が伴わない。種蒔の所作が、一連の農作業を模倣する所作に引き続いて行われる図11の孕婦の弁当運びと出産の所作の後、全体として最も後の部分に位置することが注目される。これは、農作業の所作を模倣的に順次行うという御田植祭の進行形態のなかでは異例のもので、この点からみて、六県神社の御田植祭も農作業を模倣する所作の序列が本来のものから変化し混乱しているものと考えられる。



図10 保田六県神社御田植祭 タニシ拾い

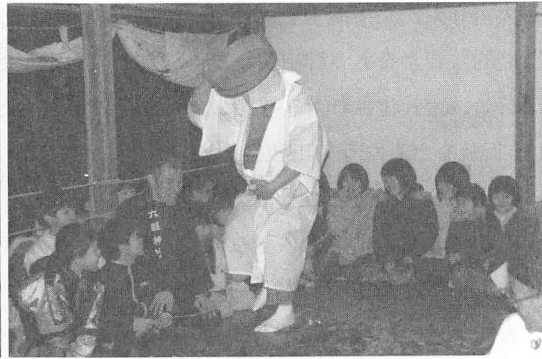


図11 保田六県神社御田植祭 孕婦の弁当運び

一方、御田植祭の詞章以外の構成要素に関しても、遠隔地間で類似するものがある。それは、御田植祭で登場する子供の人形である。大阪府平野区の杭全神社や東京都板橋区の徳丸北野神社の御田植祭に登場する子供の人形は有名であるが、これに類似するものが、図12の宇陀市の平尾水分神社の御田植祭に登場する「若宮様」とよばれる人形である。「若宮様」はワラを芯にして布をまとった人形で全身にコヨリを結びつけている。頭部には黒い尉面がかぶせてある。体に結びつけたコヨリには、病気を治す効果があると信仰されている。「若宮様」は、最初の田植えが終わった時点で、間炊持ちに伴われて小当に抱きかかえられて登場する。間炊持ちないしは小当そのものを「オナリ」としてとらえると、「若宮様」は田遊びに登場する人形の典型例といえる。この人形は、野本寛一氏の言葉を借りれば、「春を迎えて再生した稲霊の象徴」といえるのである（野本 1993）。体に巻きつけられたコヨリに込められた呪医的な機能は付加的なものと考えられる。



図12 平尾水分神社御田植祭若宮様



図13 平尾水分神社御田植祭鳥追

### (3) 詞章をとまなわない農作業を模倣する所作のみの御田植祭

奈良県内の大部分の御田植祭はこの第3類に属する。田男や田主が登場して田起しから始まり、畦切りや畦塗りといった所作を順次行う。次に、牛役が加わり牛を使った唐犁と馬鍬による耕作を経て苗代田が完成し、籾種まきを行ってから、最後に松や杉葉の模造苗を植える田植えで完了する形式が一般的なものである。この序列のなかにワラ灰による施肥や畦への豆の植え付けが加わる場合もある。これらの農作業を模倣する所作に台詞が伴うことは殆んどなく淡々と無言劇のように進行していくが、特に牛を使う場面では、牛が大暴れすることが定式化されている。また、降雨を象徴する砂掛けがおこなわれる例もみられる。さらに、松や杉葉の模造苗を蒔く時も、大変な奪いあいとなる。これらの事例では、風雨にたえる稲を象徴する「アバレ」の要素が強調されているといえる。

本類のような一般的な御田植祭と、第2類の御田植祭とを比較してみると、第2類に属する宇陀市の平尾水分神社の御田植祭では、苗代田と田植えをする田の耕作の所作が区別されている点や、図13の鳥追いの所作がある点で一段と古式の様相を呈しているのは明白である。また、川西町保田の六県神社の御田植祭も、図10のタニシ拾いの所作がある点で同様に古式の様相を示しているといえる。

大宮守人氏が指摘するように、第3類の所作のみの御田植祭も、本来は第2類のような詞章のある芸術的な要素をもつ御田植祭であったものと推定される。時間の経過とともに、詞章や所作の一部が欠落し、定式化された無言劇のような御田植祭へと変化していったものと考えられる(大宮 1981)。

### (4) 仮装をとまなう御田植祭

御田植祭における仮装は、第3類でも牛に扮したりすることが行われるが、第4類に分類した御田植祭では、異性装等のより特殊化した仮装行為がとまなう。代表的な事例を以下にあげる。

#### 1) 宇陀市野依の白山神社の御田植祭

宇陀市野依の白山神社の御田植祭は、図14に示したように早乙女(ショトメ)役の3名の男性が女装して田植えの舞を舞う特徴のあるものである。すでに、入江英弥氏が指摘しているように、早乙女役では



図14 野依白山神社御田植祭 前列左端大頭 右早乙女

なく頭屋が女装するのが本来の姿と考えられる(入江 1995)。この御田植祭の日時は5月5日の節句の日で、第1類から第3類の御田植祭が1月から2月の時期に集中しているのとは大きく催行時期がずれる特異な事例である。

#### 2) 奈良盆地南部の御田植祭

通常の御田植祭よりも催行時期が遅い4月中旬から5月上旬に行われる御田植祭は、特に葛城市や御所市等の奈良盆地の南部に集中して分布する。御田植祭の形式は第3類のような一般的なものと大きく異なるところはないが、祭礼の催行時期が明らかに他の御田植祭とずれている。

第1類から第3類の御田植祭が、年初の予祝行事としての性格を強くもつことは、祭礼の催行時期からも明白であるが、4月中旬から5月上旬の時期に行われる御田植祭はどのような経緯で成立したのであろうか。この時期におこなわれる農村の余暇行事として、4月下旬の「ダケノボリ」と5月上旬に行われる「レンゾ」があげられるが、これらの行事と、第4類の御田植祭との関連性が強く窺われるのである。実際に、宇陀市野依の白山神社の御田植祭が催行される5月5日は田休みの日で、農作業は一切しない特別の日である。その5月5日に御田植祭を行うということは、「レンゾ」等の行事に共通する余暇的な意味が強調されているものと考えられる。この点に、頭屋ない



しは早乙女役の女装という仮装の機能の本義があるものと考えられるのである。レンゾでは「お練」等の仮装が行われるが、この点も異性装などの特殊化した仮装に通じる部分といえる。このような仮装をとまなう御田植祭の事例は、現在では白山神社の御田植祭以外には見られないが、この余興的なあるいは演劇的な要素を重視すれば、牛の子産みの所作に特徴がある葛城市の加守神社の御田植祭も本類に位置づけられる可能性がある。いずれにしても、苗代作りや田植えの前の繁忙期の貴重な一日を、<sup>(3)</sup> 娯楽性の高い御田植祭で過す機能的な意味は大きいといえるのである。

#### 4、大和の御田植祭の歴史的展開

前章で詳述した現在の御田植祭の諸様相の分析から、御田植祭の系譜を近世から中世へ歴史遡及法の視点から検討することにする。

##### (1) 近世における御田植祭の様相

近世における大和における御田植祭の様相を解明する上で最も重要な資料が、手向山八幡宮所蔵の『御田植図巻』<sup>(4)</sup>である。

文政元年（1818年）の記年銘のあるこの絵巻には、田主と牛童を中心とした御田植祭の姿が描かれており、近世後期には現在と殆ど変わらない姿の御田植祭が行われていたことがわかるのである。御田植祭の詞章もこの絵巻の巻末に記されている。



図15 平尾水分神社御田植祭 机裏の記年名



図16 植槻八幡神社 模造鍬の記年銘

また、御田植祭の詞章そのものに記年銘をもつ事例もある。大宇陀町平尾の水分神社の御田植祭の最も古い台本は弘化二年（1845年）のものである。御田植祭で籾種桶や若宮様の人形をのせたりして使用される図15の小機の裏面には江戸時代前期の延寶四年（1677年）の銘がある。

さらに、御田植祭で農作業を模倣する所作で使用される模造農具にも記年銘がある資料が幾つか存在する。代表的なものをあげると、手向山八幡宮の模造鍬の柄（宝暦〇年）（1751～1764年）、種桶の底（文政二年）（1819年）、図16の植槻八幡神社の模造鍬の鍬先（天保十年）（1839年）が存在する（奈良県立民俗博物館 1980 1984）。

これらの絵巻や記年銘模造農具の存在と符合するように、江戸時代中期の元文五年（1741年）に著された村井古道の『南都年中行事』には春日大社やその他の社寺における御田植祭の記述がある。したがって、現在奈良県内各地で行われている御田植祭の大部分は近世には、現在のような形式で行われていたものと推定される。近世において、大和の地は近畿地方の穀倉地帯のひとつであったため、多くの社寺で、豊作を祈願する予祝行事の田遊びとして御田植祭が盛んに行われていたものと考えられる。

##### (2) 中世後期における御田植祭の様相

さらに、いくつかの奈良県内の御田植祭は中世までその起源がさかのぼる可能性がある。吉野山では現在吉野水分神社で御田植祭が行われている。室町時代の吉野山の年中行事に関する史料である『当山年中行事条々』には、享徳・康正年間（1452～57年）には恒例行事となっていて、修正会に関わる行事として、一山各社と各宮で猿楽とともに「御田植」が行われていたことが記されている。当時の祭礼の内容については史料のみでは未解明な部分が多いものの、「御田植」が修正会に猿楽とともに行われていたことは、奉納芸能として性格を考える上で極めて重要である（岩井 1972）（新井 1981）（樋口・岩坂・池田 2000, 2002）。

新井恒易氏や大宮守人氏の御田植祭の詞章の研究によると、吉野水分神社と手向山八幡宮の御田植祭の詞章は極めて強い類似を示していることが指摘されている。さらに、第3章で詳述したように、詞章の類似は部分的なものも含めると、手向山八幡宮と吉野水分神社に加えて宇陀市の平尾水分神社との間に、さらに手向山八幡宮と大阪平野区の杭全神社、杭全神社と川西町保田の六県神社の間にもそれぞれ見出されるのである。先の岩井氏の中世後期の吉野山での「御田植」の奉納組織の分析から、中世後期の御田植祭に猿楽座などの専門的な芸能集団が関わっていることは確実である。この点から見ると、広範囲の御田植祭で詞章の類似がみられるという現象は、ある程度まで専門の芸能集団の移動による直接的な伝習によって、当該時期の御田植祭が成立したものと推測される。

### (3) 中世前期における御田植祭の様相

御田植祭の史料はさらに中世前期にまで遡る。春日大社の社伝史料では、御田植祭に関わる儀礼である「御田植」という記事は、長寛元年（1163年）の正月にまでさかのぼる。

また、寛元四年（1246年）正月十八日には、

「今日可有田植之義、行幸之還御酉刻之間、入夜田植不吉之旨巫等申之、延引可為晦日之由云々」  
（『中臣祐定記』〔春日社記録日記一〕）

という記事のあることが注目される（本田 1967 1995）。これは春日行幸した後嵯峨天皇の還御が遅れてしまったので、夜になってから御田植を行なうのは不吉であると巫女が言うので、晦日に延期したという内容である（鹿谷 1990）。本田安次氏は、この時の御田植は田舞を含んだ田業の式（農作業を模倣する所作）であったものと推測している（本田 1967 1995）。新井恒易氏も同じように、詳細な内容は不明であるが正月の行事としての、田植風流の源流としてとらえている（新井 1981）。

それでは、このような中世前期まで遡る年初の予祝儀礼としての「御田植」の起源はどこに求められるのであろうか。筆者には、奈良朝における宮中の正月の節会の儀礼である「籍田之儀」との関係性が想起されるのである。正倉院の御物で、天平寶字二年（758年）正月の記年銘がある「子日手辛鋤」は、「籍田之儀」を示す直接の遺物である。「天皇自ら正月に田を耕して勸農垂範する」という「籍田」の儀礼は、その後のすべての年初の予祝的性格をもつ農作業を模倣する儀礼の起源となりうるものと筆者は考えるのである。宮中儀礼としての「籍田」は、その後平安時代には公家の儀礼に取り込まれ、中世前期の春日大社における正月儀礼の「御田植」成立の起源になった可能性があるものと考えられるのである。<sup>(5)</sup>

## 5、大和における御田植祭の系譜とその起源

現在奈良県内各地で行われている御田植祭も、農耕を模倣する所作の構造や序列、さらに詞章の分析から、その起源と系譜関係について、様々な視座から研究が展開されてきた。本論では、御田植祭の起源として、中世前期に神社祭礼として存在した「御田植」と古代の宮中儀礼である「籍田の儀」との関係性について提起した。さらに、「御田植」はその後の中世後期に、大和に成立した様々な芸

能、特に猿楽や田楽などの影響をうけて洗練されていったものと考えられる。新井恒易氏が指摘するように、専業の芸能集団による各地の寺院の法会の延年での奉納などで、芸能として形式が確立して各地へ伝播していったものと考えられる。

現在、田遊び形式の御田植祭は神社祭祀として位置づけられているが、中世から近世における祭礼の催行主体はむしろ寺院であったものと考えられる。このような視点から、現在奈良県内各地で行われている御田植祭の形式を再検討してみると、初祈禱を構成する要素の一つである弓打ちと一連のものとして田遊びが行われる奈良市押熊町の八幡神社や、桜井市小夫の天神社の御田植祭が注目される。さらに、模造苗の椿の枝に牛玉札を結んで授与する川西町保田の六県神社、模造苗に楡の枝を使う宇陀市平尾水分神社の御田植祭などは、明治初年の神仏分離令以前の御田植祭の構造をある程度まで反映しているものといえる。つまり、近代以前には、寺院の修正会に相当する初祈禱において田遊び形式の御田植祭が行われていて、先の事例は旧儀を今日に伝えている可能性が高いものと判断されるのである。

上記の点から、大和における御田植祭がなぜ年初の予祝儀礼として田遊びが中心となるのかという要因が導きだされるのである。それは、大和の御田植祭が、神仏習合の様相をもつ地方寺院の正月行事である初祈禱に伴う予祝芸能としての性格を強く有しているからである。

一方、御田植祭の詞章の広範囲にわたる類似性と農作業を模倣する所作の構造と序列から基本的な構成と略式の構成といった形式分類が可能であり、そこには時間軸で捉えた場合には芸能の伝播の流れといった御田植祭の系譜関係が想定できるといえる。

詞章の構成の高い類似性の要因については、新井恒易氏も指摘するように、中世後期以降の専門的な芸能集団が関わっていたものと考えられる。特に、田遊びが寺院の修正会と修二会における延年の奉納芸能であった可能性を考えると、専門的な芸能集団の巡行によって、各地に田遊びが詞章とともに伝播したのと考えられる。さらに、それが伝習などによって二次的に伝播することによって、多少の詞章の異同が生じたものと考えられる。農作業を模倣する所作の序列や構造の分析でも、本来は苗代田の田起しから田植えまで、一連のものとして演じられていたものが、部分的な所作に重点を置くことによって、所作の一部が欠落したり序列の混乱が生じ、さらに稲刈の所作などの付加などが行われたものと推定される。この点から、奈良県内の御田植祭をみると奈良市の手向山八幡宮の御田植祭や、宇陀市の平尾水分神社の御田植祭などは、近世の田遊びの様相を忠実に伝承している最も古式の様相をもつ御田植祭といえるのである。農作業を模倣する所作の序列に異同があるものの、これらに準じる古式の様相をもっているのが、川西町保田の六県神社の御田植祭といえる。子産みという付加的要素が特に強調された特殊化した御田植祭ともいえる。これらに加えて、5月という非常に遅い時期の御田植祭で、異性装という要素に特色がある宇陀市野依の白山神社の御田植祭も特殊化した事例といえるのである。

しかし、御田植祭は長期間の歴史的な展開があり、現在の事例から直接歴史遡及的に分析するのが困難な面もある。それが、春日大社の御田植祭である。前述のように社伝の史料から平安時代まで起源が遡る最も古式の御田植祭といえる。現在は、農作業を模倣する田遊びの部分と巫女による田舞の神楽が一連のものとして行われている。しかし、田舞の神楽が他に例をみない完成度の高いもので、両者がもともと一連のものとして御田植祭を構成していたかどうかはなお検討の余地があるといえる。手向山八幡宮の『御田植図巻』に描かれている八乙女や、中世の吉野山各社の祭礼における八乙女が、田遊びとの関連のなかで、どのような役割を果たしたのか、春日大社の田舞の神楽はそれを解明する重要な手懸りといえる。しかし、近世と近代以降の祭礼構造の変容が大きいため、春日大社の御

田植祭において、近世以前にどのような形で八乙女の神楽が田遊びと関係していたのかは、引き続き検討課題としたい。

## 6、おわりに

奈良県内には数多くの伝統的な祭礼、特に農事に関わる祭礼が伝承されてきた。なかでも、御田植祭は中世まで遡る古い歴史をもっている。しかし、ここ10年から20年の間に、少子高齢化と過疎化、そして、社会構造の変化という避けることのできない現実と直面し、劇的にその数が減少し、保存と伝承は危機的状況にあるといえる。

少子化による祭礼の伝承の危機に、さらに拍車をかけているのが核家族化である。伝統的な生活様式や祭礼は拡大家族のなかで可能なことで、核家族のなかでは困難といわざるをえない。一方、農山村をめぐる生活様式、特に産業基盤の変化と専業農家の減少も、農業などの生産様式と密接にむすびついた祭礼や伝統行事の伝承を困難にしているといえる。祭礼組織も、当屋や当家などよばれる当番制度を廃止して保存会へと移行している例も多くみられる。

このような危機的状況への対応策として、以下の二つの方法が想起される。

一つは、地域の祭礼行事の伝承と学校教育との連携である。総合的な学習の時間を活用した積極的な取り組みが奈良県内の幾つかの小学校ですでに実施されている。もう一つは、地域の伝統的な祭礼がいかに貴重なものかを、地域内外に情報発信することである。地域の伝統文化の重要性を、地域の人たち自身に再認識してもらうということが、伝統的な祭礼の保存にあたって最も重要なことといえる。具体的には、地域の祭礼や芸能を、隣接地域の同種行事と比較するための合同発表会や、インターネットを利用した情報発信等が想定される。伝統芸能や祭礼の合同発表会は、すでに、「近畿東海北陸ブロック伝統芸能祭」や、「紀伊半島民俗芸能祭」等が実施されている。さらに、無形文化財は無くなってしまおうと何も残らないので、映像記録を残し地域の内側と外側と双方に発信することが必要である。伝統的祭礼と行事の保存と伝承に向けて、情報メディアの役割はますます重要になってくるものと考えられる。

### 〔註〕

- 1、押熊八幡神社と小夫天神社の御田植祭の静止画像は、写真家の田中真人氏から提供をうけたことを明記して謝意を表したい。
- 2、六県神社の御田植祭もオナリ役が女装するが、これは4類の仮装の系統とは別のものとして位置づけられる。
- 3、奈良盆地と大和高原では農事暦に一月程度の時間差があるため、一元的に論じることはできない。
- 4、『御田植図巻』の表題は、『手向山神社 御田植祭之図』となっている。
- 5、奥野義雄氏は、『類聚国史』等の史料にみられる平安前期の「耕田の礼」の記述から、「勸農」という視座から中世の「大田植」が成立したものとし、それが芸能的な御田植祭の起源となったものと推定している（奥野 1981）。

### 〔引用文献〕

- 新井恒易1981 『農と田遊びの研究』 明治書院  
入江英弥1995 「野依・白山神社のオンダ」『宇陀の祭りと伝承』 桜井満他編 111～124頁 おうふう  
上野 誠1995 「平尾水分神社のオンダ」『宇陀の祭りと伝承』 桜井満他編 99～110頁 おうふう  
岩井宏実1972 「御田植神事」『吉野町史 下巻』 418～423頁 吉野町役場  
浦西 勉1990 「手向山八幡神社の御田植祭り」『奈良市民俗芸能調査報告書―田楽・相撲・翁・御田・神楽―』 109～112頁 奈良市教育委員会  
大宮守人1981 「県内御田植祭の詞章について」『奈良県立民俗博物館研究紀要』 5号 27～40頁

- 奥野義雄1981 「予祝儀礼・御田植と中世農民—大田植と勸農の接点によせて」『奈良県立民俗博物館研究紀要』  
第5号 11～26頁
- 春日顕彰会1975 『春日神社伝神楽調査報告』
- 春日顕彰会1989 『和舞、社伝神楽の伝承並びに比較調査報告書』
- 鹿谷 勲1990 「春日大社の御田植行事」『奈良市民俗芸能調査報告—田楽・相撲・翁・御田・神楽』133～144頁  
奈良市教育委員会
- 城崎陽子1989 「吉野水分神社御田植祭」『吉野の祭りと伝承』桜井満他編 71～81頁 おうふう
- 辻本好孝1944 『和州祭礼記』天理時報社
- 豊田八十代1919 『奈良の年中行事』奈良明新社
- 奈良県史編纂委員会1988 『奈良県史 民俗編(下)』
- 奈良県立民俗博物館1984 『大和の年中行事 稲作とまつり』
- 奈良県立民俗博物館1980 『農耕儀礼—御田祭と野神まつり—』
- 樋口 昭 岩坂七雄 池田敦他 2000 「大和の御田」『埼玉大学紀要(教育学部) 人文・社会科学』第49巻1号  
13～27頁
- 樋口 昭 岩坂七雄 池田敦他2002 「大和の御田Ⅱ—八乙女をめぐる—」『埼玉大学紀要(教育学部) 人文・社  
会科学』第51巻2号 27～41頁
- 野本寛一1993 『稲作民俗文化論』雄山閣出版
- 本田安次1967 「春日神社の御田植祭」『田楽・風流一』196～200頁 木耳社
- 本田安次1995 「春日大社の御田植祭」『日本の伝統芸能』第8巻 559～562頁 錦正社

